

サンタさん

お大事に



## サンタさんお大事に

---

## サンタさんお大事に

神田由美

「トモヤ！何なのこれは！」

母さんの怒鳴り声が響く

「あんた、サンタさんにこんな手紙書いて！」

母さんの手にはチラシが。学校でサンタさんへ手紙を書こうと言う授業があってオレは正直に書いたわけだ。チラシの裏に。

『サンタなんか消えちゃえ！』

母さんは鬼の形相だ。

「先生に呼び出されてどれだけ恥ずかしい思いをしたと思ってるの」

「じゃあさ、先生さ、サンタに伝えたいこと書けて言ったじゃん。」

「なにを訳の分からないこといってるの」

「サンタさ、去年そろばんくれたんだぜ。その前はおあさんのいうこと聞きなさいって漢字ドリルくれたんだぜ」

「なにが不満なの！」

オレは真っ赤になった。

「サンタなんて嫌いだ」

「ああ、そうですか。そんなに悪い子ならサンタさんに言って今年のプレゼントは無しにしますよ」

「いらねーよ！」

クリスマスって子どもが一番うれしい日だって誰か言ってなかったっけ。オレにとっては毎年期待はずれ。

母さんはまだ怖い顔をしているし、オレは家にいたくなくて外へでた。

母さんもカンカンだけどオレだってカンカンだ。なんで怒られなきゃならないんだ。

怒りながらめちゃくちゃに歩いた。歩いているうちにだんだん建物が少なくなって、木が多くなってきた。寒いなあって思ったら雪が降っていた。

あれ？ここどこ？すっかり雪もつもっているし、薄暗くなってきた。戻るに戻れない。

こんなことで泣くもんか。オレは前を見た。そんなに遠くないところで明かりが見える。

近づいてみると家だった。入り口の近くに大きなそりがある。この家ってもしかして？

オレは玄関のドアをノックした。返事はない。よくみると『ご自由にお入りください』と書いてある。ドアに鍵はかかってなかった。

中にはいると、暖炉に赤々と火が入っていて、やせ細ったおじいさんがコックリ寝ている。赤い帽子に赤い服まさか。

「あの、もしかしてサンタですか」オレは言った。おじいさんは目をひらいた。

「はあ？何かおいしいなすったか」

目がしょぼしょぼしている。そしてむせてせきをした。

「最近すっかり耳が遠くなったの。もしかしてトモヤ君か」

オレがうなずくとおじいさんが立ち上がった。なんだかよぼよぼしていてあぶなっかしい。

「わしはなトモヤ君専属のサンタじゃ。他のサンタには手紙が届いたが、トモヤ君の手紙だけわしのところに届かなかったから直接聞こうかと思っての」

オレはもごもごした。だってあんなこと言えないし、もうすでによぼよぼで何だか言わなくてもってかんじだし。

「あの、オレゲームがほしいんです」

「何、辞書がほしいんだって？」

「いや、ゲーム、が、ほしいんです！」

「ふむ、英語の辞書がほしいのか」

ぜ、全然違う… これじゃほしいものがなくて当たり前だよ。でも、オレはおじいさんサンタを見ているとしょうがないなって思った。

「そうかそうかじゃあクリスマスにな」

サンタがぼやけて見える。世界がひっくり返りそうだ。

気がつくとオレは家のドアの前に立っていた。

「どこいったの」

母さんがドアをあけてあきれ顔でオレをみる。

「サンタさんの手紙書き直す」

「あらそう、明日学校に出すのよ」

オレはちゃんと便せんに手紙を書いた。

「サンタさん。いつまでも、長生きしてください。サンタさんお大事に」

クリスマスのお話を書いてみました。

いかがでしたでしょうか。

コメントお待ちしております。

そのほかにも数話童話を書かせていただい

ていますので、よろしかったら神田由美

で検索してみてください。

ありがとうございました。